紀尾井だより

7/8 July / August 2021 [Vol.148]

インタビュー

ピョートル・アンデルシェフスキ

音楽でつづる文学4

平家物語 ー敦盛ー

連載

邦楽名曲解体新書 私のおすすめこの一曲

文楽『菅原伝授手習鑑』寺子屋の段

クラシック音楽のテーマに基づく3つの話

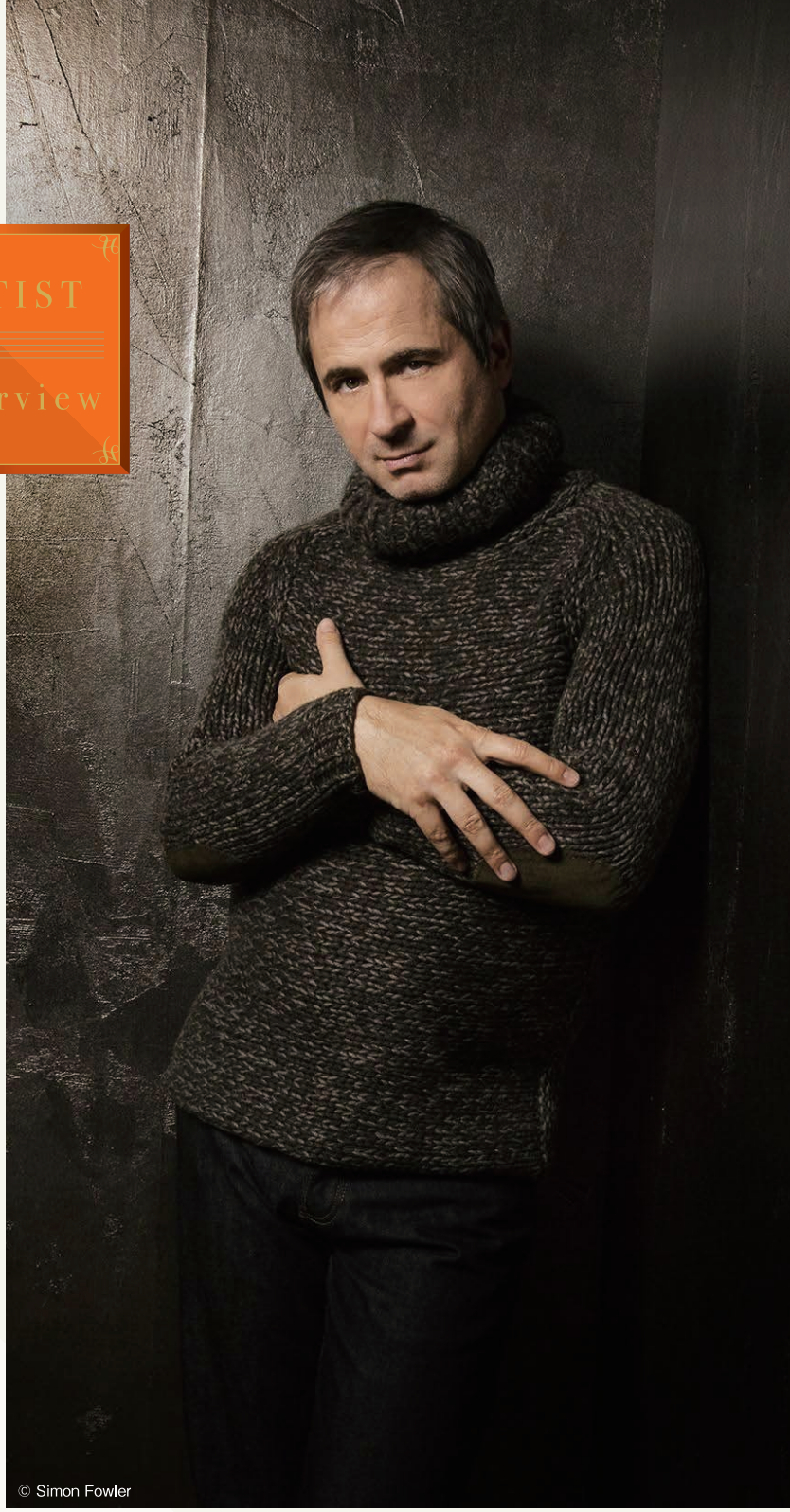
マリンバをめぐる3話

紀尾井町音楽散歩 第2回

紀州徳川家とクラシック音楽

紀尾井ホール

ARTIST Interview


© Simon Fowler

ピョートル・アンデルシェフスキ

取材・文／正木裕美（音楽ジャーナリスト）

虚飾を排して知性と情感を音楽へと注ぐピアニストのピョートル・アンデルシェフスキが11月、じつに14年ぶりに紀尾井ホールへ戻ってくる。3日にわたる公演では、紀尾井ホール室内管弦楽団との初共演にモーツァルトの協奏曲2曲、そして翌週にはJ.S.バッハの「平均律クラヴィーア曲集」第2巻より12曲を選曲。コロナ禍は「人生で本当に重要なこと、大切な人に気づかせてくれた」と語るアンデルシェフスキが、厳選したプログラムに込める想いとは――。

【モーツァルト】

今回、紀尾井ホール室内管弦楽団との初共演にアンデルシェフスキが選んだのはモーツァルトの珠玉のピアノ協奏曲2選。日本で弾くのは初めてとなる第12番イ長調と、モーツァルトが遺したたった2つの短調の協奏曲から第24番ハ短調を披露する。

モーツァルトの協奏曲は、私にとって限りなくパーフェクトに近いものです。なぜモーツァルトかと聞かれれば、その言葉以外に見つかりませんね。中でも今回演奏する第12番と24番の協奏曲は私のお気に入りです。12番は確かにオーケストレーションの点では控えめですが、のちの協奏曲で見られるような豊かな表現を既に備えています。24番はデビュー2枚目のアルバムでも収録していますが、曲の捉え方は当時とそれほど変化していないように思います。もしかしたら今はより流動的で、コントラストの少ない演奏かもしれませんが……でも自分ではよくわかりませんね。

今回は指揮者を立てずに弾き振りを行う。

弾き振りをする最大の利点はオーケストラとピアノの一体感を得られることです。今回の2曲でも同じことが言えますが、指揮者なしで演奏する際はピアノがオーケストラや、時には楽器の特定のグループと絶えず音楽による対話をしています。私たちの間には会話をしているような感覚がなければなりませんし、そのためにお互いの奏でる音楽により一層耳を傾ける必要があるのです。私にとっては指揮者を介するよりもみずから弾き振

りをする時のほうがこの対話が密接に感じられ、アンサンブルがよりよく機能すると思っています。

共演する紀尾井ホール室内管弦楽団は首席指揮者ライナー・ホーネックの弾き振りでその都度親密なアンサンブルを作り上げてきた。さらに昨年9月の定期演奏会では敢えて指揮者を置かず、高いアンサンブル力を発揮している。彼らとの音楽的対話が、アンデルシェフスキの思案に満ちたモーツァルトを瑞々しく響かせてくれると期待したい。

【J.S.バッハ】

一方、リサイタルでは「平均律クラヴィーア曲集」第2巻から独自に選んだ12曲を披露する。対になるプレリュードとフーガが24の調で書かれたこの作品は、ピアノを弾く人にとってのいわばバイブル。特に晩年に書かれた第2巻は、「フーガの技法」に続く作曲技法の集大成とも言われている。アンデルシェフスキもバッハを敬愛し、「イギリス組曲」や「パルティータ」などへデビュー間もないころから取り組んできた。何がそんなに彼を魅了し続けるのだろうか。

© Robert Workman

バッハは私に他の誰よりも自由な感覚を与えてくれる作曲家であり、いくらその音楽に向き合おうとも、決して「終わり」に達したという心境になり得ないのです。バッハの音楽を何年勉強しても、常に新しいドアは開かれたままです。

「平均律クラヴィーア曲集」には信じられないほど多くの作曲技法が盛り込まれていますが、同時に私にとっては詩的な性格を持った作品でもあります。プレリュードとフーガから成るこの24曲の組み合わせには、探求すべき無限の領域が残されています。

かねてから私は私的にこの作品に取り組んできましたが、レコーディング、そしてリサイタルで取り組みたいと考え始めたのは2018年の1月でした。そこから最終的に第2巻から12曲へとまとめあげるまでにおおよそ3年の月日を要しましたが、ようやく機が熟したと思っています。敢えて第2巻を選んだのは私の心により近いと感じるからです。特にプレリュードは第1巻よりもより複雑で、そこにもっとも魅了されています！

さらに、この作品のすばらしい特徴のひとつは、その無限に広がる多様性です。似ているプレリュードは2つとありません。ですがそのすべてにツィクルスのようにレコーディングや演奏会で取り組む考えはなく、今回私は第2巻の中から自分にとって意味があると思われる順序で12曲を組み合わせています。中でもハ長調とヘ短調に見られる調の関係性や、ト短調とホ長調に見られる曲の性格と調性の結びつきは、12曲を組み合わせる上で外せないと考えました。

「調性」と言えば、バッハはそれぞれの調に特定の感情を結び付けて考えていた、という説もあるそうだ。またバッハに限らず、作曲家の在世当時の演奏スタイルを追究する演奏も近年盛んに行われている。

例えば第1巻と第2巻の変ロ短調のプレリュードとフーガを考えてみると、感情の上で共通項を見出すのは難しいと思います。でも私が嬰ニ短調を弾くとき、この奇妙で珍しい調性と作品の特徴――孤立感と荒廃――との間に関連があると感じずにはいられません。

また演奏をする上で、作曲家の在世当時の演奏スタイルを認識することは非常に重要です。ですが、弾き手の声を演奏解釈の中で表現することもまた、同じくらい大切なことだと思っています。それが、音楽がオーセンティックで生き生きと聞こえる解釈の条件です。

＊本稿は、メール・インタビューをもとに構成しました。

紀尾井ホール室内管弦楽団

第128回定期演奏会

プロコフィエフ
交響曲第1番ニ長調《古典交響曲》op.25（指揮なし）

モーツァルト
ピアノ協奏曲第12番イ長調 K.414

ルトスワフスキ
室内オーケストラのための小組曲
（1950年オリジナル版）（指揮なし）

モーツァルト
ピアノ協奏曲第24番ハ短調 K.491

11/5（金）19:00　11/6（土）14:00

ピョートル・アンデルシェフスキ

バッハ・リサイタル

バッハ:平均律クラヴィーア曲集第2巻より12曲（予定）

前奏曲とフーガ
第１番　ハ長調　BWV870
第12番　ヘ短調　BWV881
第17番　変イ長調　BWV886
第８番　嬰ニ短調　BWV877
第11番　ヘ長調　BWV880
第22番　変ロ短調　BWV891
第７番　変ホ長調　BWV876
第16番　ト短調　BWV885
第９番　ホ長調　BWV878
第18番　嬰ト短調　BWV887
第23番　ロ長調　BWV892
第24番　ロ短調　BWV893

11/13（土）14:00

※公演開催についての最新情報は紀尾井ホールウェブサイトをご確認ください。

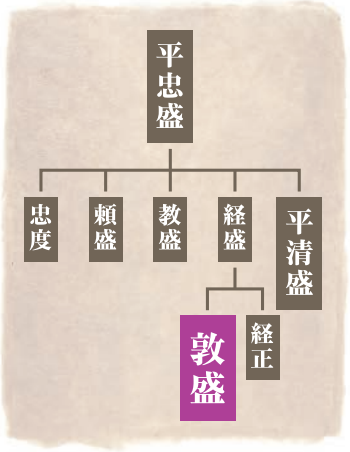
音楽でつづる文学4

平家物語 ―敦盛―

平家の栄華と没落を描いた有名な軍記物語『平家物語』は、鎌倉時代（1185-1333）に成立し、琵琶法師による音に乗せて津々浦々に語られていきました。『平家物語』は、後世の芸術にも大きな影響を与えました。中でも敦盛の段は、悲劇の主人公としてさまざまなジャンルの作品に取り上げられ、多くの人に知られています。

平敦盛は、平清盛の弟・経盛の末子で幼少から笛の名手として知られていました。なお、兄の平経正は琵琶の名手です（音楽でつづる文学2平家物語―竹生島で登場）。敦盛は父から「青葉の笛」を授けられます。かつて敦盛の祖父・平忠盛が鳥羽院より賜ったという名品ですが、『平家物語』では「小枝」という名前で伝えられています。16歳であった敦盛が初陣を飾ったのは、元暦元年（1184）2月7日、後世「一の谷の合戦」と呼ばれる激戦でした。

勝川春章画 平敦盛（シカゴ美術館蔵）



『平家物語・巻第九・敦盛最期』は、一の谷の合戦の終焉、源氏の武将熊谷次郎直実が、海上へと逃れる平家の武将を呼び止める場面から始まります。一騎打ちの末、取り押さえたのは若き青年武将でした。武士の務めとはいえ、わが子と同年輩の高貴な公達敦盛の命を奪うめぐり合わせになってしまった熊谷の悲しく辛い心情を描いています。

この物語を山田流箏曲では、明治中期に軍歌としても親しまれていた新体詩を歌詞にして、山登万和（1853-1903）が「須磨の嵐」として作曲しました。激しい戦を表現する手事（歌と歌の間に挟まれた長い器楽部分）と、悲壮感あふれる語り物部分が対照的です。明治中期以降の山田流箏曲を代表する曲といえます。

大和楽「須磨の敦盛」は、舞踊のために平成3年（1991）に作られた「兵庫旅情」全三部のうちの一つです。本公演では、敦盛を花柳寿楽が、熊谷を花柳基がそれぞれ立方を務め、新たな振付でご覧いただきます。この公演のために振付をした五代目花柳壽輔さんに、お話を伺いました。

平家物語　敦盛の振付にあたって

五代目 花柳壽輔

曲を聴いて、全体の大まかな構成が自然と浮かんでまいりました。物語の情景が浮かぶ綺麗な曲というのが第一印象です。

振付をする時にポイントとしたところは、元々この作品は昨年九月に亡くなった祖父二代目花柳壽應にいただいたお仕事で、延期もあり祖父が唯一残していった仕事でもありました。祖父だったらどう創るだろうということを含め、また曲を聴いた上で得たイメージから配役が浮かび、おのずと振りもおりてきたような感じでした。

敦盛や熊谷に関しては実際に兵庫県の須磨へ足を運び敦盛塚や須磨寺の宝物殿の展示を通して感じたことも反映できたと思います。歌詞にも出てまいります青葉の笛なども実際に保存されており感慨深かったです。敦盛は歌詞に「十七歳」とあり、演じる寿楽さんの御子息がちょうどそのくらいだとお稽古の際に談笑しておりましたが、年齢や性別に関係なくさまざまな人が踊りとして人物像を表現するのも日本の伝統芸能の醍醐味だと思います。

振付風景（前:花柳壽輔、奥:花柳源九郎）。本年1月、稽古場にて

「青葉の笛」とされる笛が、現在も兵庫県神戸市の須磨寺に保存されている。（資料提供:須磨寺）

音楽でつづる文学4

平家物語 ―敦盛―

解説『平家物語』に描かれる敦盛
平家琵琶「敦盛最期」
山田流箏曲「須磨の嵐」
大和楽「須磨の敦盛」（花柳壽輔振付）

7/15（木）18:30

※公演開催についての最新情報は
紀尾井ホールウェブサイトをご確認ください。

邦楽名曲解体新書

私のおすすめこの一曲

文楽『菅原伝授手習鑑』寺子屋の段

お話／豊竹呂太夫さん

身代わりを題材とするスリリングな展開

『菅原伝授手習鑑』は祖父・十代豊竹若太夫の十八番ですが、私も六代豊竹呂太夫を襲名した際の披露狂言として上演させていただきました。菅原道真に関する伝説を元に創作された作品で、特に寺子屋の段が有名ですね。恩義ある人の若君を救うために自分の息子を犠牲にするという、非常に緊迫感のあるスリリングな内容です。

告げ口によって九州に流された菅原道真（芝居では「菅丞相」）の弟子・武部源蔵は、菅丞相の子・菅秀才を匿っています。そのことが発覚し、菅丞相の政敵・藤原時平に仕える春藤玄蕃と松王丸が「首を差し出せ」と、源蔵が師匠を務める寺子屋にやってきます。源蔵は青ざめ、寺子屋に通う子どもの中から身代わりを探しますが、みな田舎者ばかり。そこへちょうど、小太郎が入門してくる。その育ちのよさそうな顔を見て源蔵はこの子を身代わりとすることに決め、断腸の思いで首をはねます。差し出された首が本物かどうかを確認する「首実検」の役目は、その顔を知っている松王丸。実は小太郎は、松王丸の息子なのです。今は時平に仕える松王丸ですが、幼いころは菅丞相の恩を受けて育ちました。その恩義に報いるべく、小太郎を菅秀才の身代わりとするために寺子屋に入門させたのです。

現代人にも共感できる心の葛藤を描く

小太郎は子どもながらに自分の立場をわきまえていて、健げにも既に覚悟を決めている。「親子は一世、夫婦は二世、主従は三世」という言葉がある通り、昔の人はそういう教育を受けてきたんですね。主君のためなら命を捨てなさいと。でも、「主従三世」とはわかっていながらも、松王丸の胸の内は悲しみでいっぱい。小太郎は潔い最期であったという様子を聞いて、「よくやった、ハッハッハッ…」と笑うのですが、やがて涙声も混じり、泣き笑いに。その葛藤が江戸の人の心をとらえたんでしょうね。小太郎の亡骸を野辺送りする「いろは送り」の場面では足拍子もあって、ハッピーエンドと見まがうような高揚感。喜怒哀楽を超えたものがあります。さすがに現代では身代わりはありませんが、「心の葛藤」という点では、現代人の心にも重ね合わせられる部分があると思います。

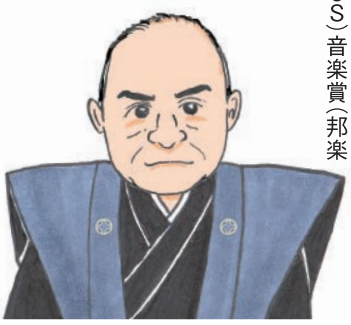
源蔵の有名な台詞を二つご紹介しましょう。一つは身代わりの子どもを探す場面で、「いずれを見ても山家育ち」と嘆く言葉。その時、私は客席を見渡すんですよ。あと、身代わりを探さねばならないという辛い状況を嘆いて「せまじきものは宮仕え」と吐露する。この台詞も、現代人に共感される点ではないでしょうか。

私は学生時代、文楽の道に進むつもりはなく、小説家になりたかったんです。大江健三郎作品などのシュールな世界に惹かれていました。でもある時、久しぶりに文楽を観る機会があり、「太夫がわけわからんこと言うて、三味線がベンベンして、大の男三人でひとつの人形動かして、その横には素顔があって、けったいやなあ…」と思ったのですが、ずっと観ているうちに、「いや待てよ、結構華やかだし、この異様な構図こそシュールだ！」と思えてきた（笑）。古典芸能とはいえ、とても新鮮に映ったのです。太夫は子ども、お姫さま、武士、年寄など、一人で何役も語り分けなければならないし、同じ武士でも善人と悪人とでは声の出しかたが違います。しかも複雑な曲節を三味線と合わせないといけない。オペラは一人一役ですが、太夫は情景描写も人物描写も、全部ひとりでやりますからね。世界で一番難しい芸能と言えるのではないでしょうか（笑）。

取材・文・イラスト／尾花 知美
（月刊『江戸楽』編集部）

豊竹呂太夫

昭和四十二年三代竹本春子太夫に入門、祖父十代豊竹若太夫（人間国宝）の幼名の豊竹英太夫を名乗る。同四十三年大阪毎日ホールで初舞台。同四十四年春子太夫の逝去により竹本越路太夫の門下となる。平成二十九年六代豊竹呂太夫を襲名。同年第四十七回ＪＸＴＧ（現・ＥＮＥＯＳ）音楽賞（邦楽部門）受賞。



クラシック音楽のテーマに基づく3つの話

マリンバをめぐる3話

マリンバを初めて目にした時、小学校の音楽室で触れた木琴とあまりのスケールの違いに驚き、そして独特で魅力的な音色や、目にもとまらぬ速さで何本ものマレットを自在に操る奏者の格好よさに息をするのも忘れるくらいに引き込まれた体験を覚えています。今回はそんなマリンバをめぐる3つのお話です。

1 楽器

木の板の下に瓢箪を付けて並べた物が、マリンバの原型と言われています。アフリカで生まれたこの楽器は、アメリカ大陸に渡り、中南米で民族楽器として発展しました。その後、金属の共鳴管を付けたコンサート楽器としてアメリカで製作されたのが、20世紀の初めです。

当初、音域は4オクターブでしたが、さまざまな奏者やメーカーによって、1980年代に5オクターブが開発されました。今ではこの音域が主流となりつつあります。全長約260㎝、奥行きは長い所で120㎝、高さは81～100㎝あり、セミダブルベッドほどの大きさです。

「こんな大きな物を、どうやって運ぶのですか?」と、よく質問されます。実はこの楽器、5つのパーツに分解できます。①鍵盤、②鍵盤をのせている桁(けた)、③パイプ(共鳴管)、④両側の側板、⑤側板を支える心棒。この内、②桁、③パイプ、⑤心棒は、真ん中から2つに分けることができます(メーカーによっては、真ん中で折り畳むこともできます)。私たち演奏者は、5つのパーツに分解し小さくして、ちょっと大きめの乗用車に詰めて運びます。搬入に1時間、搬出に1時間ほどかかり、演奏も含めるとなかなかの重労働です。

2 マレット&奏法

演奏する時は、棒(素材は木や籐)の先端に球状のヘッドが付いたマレットを使います。ヘッドの素材やサイズ、巻かれている糸の素材や巻き方、巻き加減(強弱)で、その数は数千種類にもなります。中には出したい音を求め、自分で巻く人もいます。マレットの選択は奏者に任されているため、奏者が持つ曲のイメージや出したい音など、奏者ならではの音色を聴くことができます。

マリンバの原形と言われる「バラフォン」
(資料提供:武蔵野音楽大学楽器博物館)

マリンバはピアノと同じ減衰楽器なので、音が伸びません。そのため、メロディが繋がって聴こえるように、マレットを持った両手を交互に早く連打する『ロール(トレモロ)』という奏法があります。またここ半世紀で、片手に持った2本のマレットを、手首を回転させてロールする『ワンハンドロール』という奏法も、生み出されました。

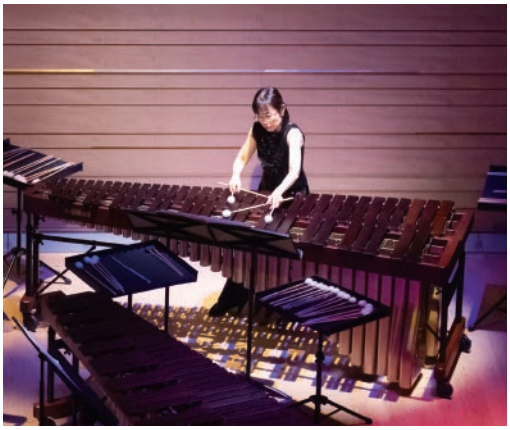
マレットは通常片手に1～2本、中には3本持つ人もいますが、手に持った複数のマレットの幅を変えて演奏する様は、見ていて圧巻です。耳だけでなく目でも楽しめる楽器だと思います。

3 魅力

マリンバの魅力はなんと言っても、素朴な木の響きでしょう。そのぬくもりある音色はまっすぐ心に響き、人を癒します。

ここ一世紀で、マリンバは楽器、楽曲、そして奏法において、目覚ましい発展を遂げてきました。しかし、鍵盤にあたっただけで音が出てしまうというシンプルさゆえ、奏者次第で奏でる音色がいかようにも変化する、難しい楽器だと思います。今後より一層、奏者の音楽性が問われるだろうこの楽器の未来が、楽しみです。

文/和田光世
(東京佼成ウインドオーケストラ 打楽器奏者)



全身を使ってダイナミックに演奏される様は圧巻です。

マリンバをめぐる紀尾井ホール公演

MITSUBISHI ESTATE CO., LTD. presents
紀尾井 明日への扉 第29回樋渡希美(打楽器)

7/8(木) 19:00

樋渡希美: トーキングドラム in Stuttgart
グロボカール: ?身体～ボディ・パーカッションのための
福士則夫: グラウンド
ドビュッシー/樋渡編:月の光
ラヴェル/樋渡編:《クープランの墓》よりプレリュード
三木稔:マリンバ・スピリチュアル ほか

※公演開催についての最新情報は紀尾井ホールウェブサイトをご確認ください。

4.2(金)　新 紀尾井素踊りの会　第二回 藤間勘右衛門

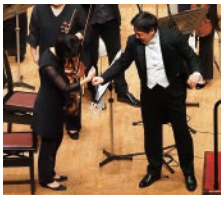
清元「うかれ坊主」

清元「長生」

昨年、開館25周年の邦楽部門の幕開けに予定していた公演が、一年越しにようやく開催できました。力強く美しく貴品ある家元の踊りに感無量でした。

ダイジェスト映像
公開中！

5.21(金)・22(土)　紀尾井ホール室内管弦楽団　第126回定期演奏会



KCOに初登場となった指揮の垣内悠希さん。そして名手揃いのオーケストラ。［バレエ音楽と古典］をテーマに心躍る演奏をお届けしました。

編集後記

前回からスタートしました「紀尾井町音楽散歩」お楽しみいただけていますでしょうか。この企画にあたり、紀尾井町や赤坂、麹町など、江戸時代に幕府の重要な拠点となっていた土地には多くの文化人も暮らしていたことを改めて知り、とても勉強になっています。ゆかりの場所へ取材に行くと、街並みに江戸や明治の面影が残っているところもあり、ぶらり歩くだけでも楽しめますので、当時に思いをはせながら散策いただきたいなと思います。

今号の表紙　『ファゴットとグラジオラス』［協力］花／hanadouraku　ファゴット／殿岡芽依、阿部和憲

ファゴットは薪束という意味です。低音域を担うことが多いので、トランペットやフルートのように華々しいソロパートが多いわけではないですが、独特の美しい音色と幅広い音域を持つこの楽器は、ソロの曲などで聴くとたちまち虜になること請け合いです。グラジオラスは別名唐菖蒲、オランダ菖蒲。古代ローマの剣でグラディウスが名前の由来と言われています。明治時代に輸入され、今では夏のポピュラーな花になっています。

紀尾井ホールにご支援いただいている企業および個人の方々です

紀尾井サポートシステム会員（五十音順・「株式会社」等表記及び敬称略）

《特別協賛会員》 A.ランゲ&ゾーネ／日鉄ソリューションズ／三菱商事／三菱地所

《みやび会員》 伊藤忠商事／大島造船所／KDDI／菅原／住友商事／丸紅／三井住友銀行／三井物産／三井不動産／三菱商事／三菱地所／メタルワン　ほか匿名2社

《ひびき会員》 オカムラ／きらぼし銀行／高砂熱学工業／竹中工務店／山下設計

《みどり会員》 青鬼運送／赤坂維新號／赤坂 エクセルホテル東急／今治造船／ヴォートル／エーケーディ／NTTドコモ／荏原冷熱システム／鹿島建設／ザ・キャピトルホテル　東急／三協／清水建設／上智大学／西武プロパティーズ／大成建設／千代田商事／テェイスト・ライフ／東芝ライテック／永田音響設計／ニュー・オータニ／ハウス食品グループ本社／パナソニック／富士フイルムビジネスイノベーションジャパン／松尾楽器商会／三井住友信託銀行／三菱UFJ銀行／三菱UFJ信託銀行／三菱UFJモルガン・スタンレー証券／ミュージション／明治座舞台／ヤマハサウンドシステム／有帆

《あおい会員》 青木陽介／飯沼万里子／石崎智代／磯部治生／井上善雄／植竹浩樹／大武和夫／小畠 徹／片山能輔／久保祐子／栗山信子／佐久間庸行／佐部いく子／清水　正／清水多美子／清水康子／鈴木　亮／高下謹壱／田中　進／外山雄三／鳥居荘太／中塚一雄／中西達郎／西村剋美／原田清朗／北條哲也／堀川将史／牧本惠美子／松枝 力／松原 良／松本美恵／簑輪永世／宮本信幸／陸田 実／村上喜代次／持留宗一郎／八木一夫／八木晶子／山内寿実／吉峯裕毅

ほか匿名23名　計197口　（2021年6月1日現在）

特別支援会員（五十音順・「株式会社」等表記略）

アステック入江／五十鈴／NST日本鉄板／NSユナイテッド海運／NSユナイテッド内航海運／エヌエスリース／エヌテック／王子製鉄／大阪製鐵／九築工業／草野産業／黒崎播磨／合同製鐵／小松シヤリング／山九／産業振興／三晃金属工業／サンユウ／三洋海運／ジオスター／新日本電工／スガテック／大同特殊鋼／大和製罐／高砂鐵工／高田工業所／鶴見鋼管／DNPエリオ／テツゲン／東海鋼材工業／東邦シートフレーム／トピー工業／日亜鋼業／日鉄環境／日鉄ケミカル&マテリアル／日鉄建材／日鉄鋼管／日鉄鉱業／日鉄鋼板／日鉄興和不動産／日鉄ソリューションズ／日鉄テックスエンジ／日鉄ドラム／(旧)日新製鋼／日鉄物産／日鉄物流／日鉄物流君津／日鉄物流八幡／日鉄保険サービス／日鉄ボルテン／日鉄溶接工業／日本金属／日本触媒／濱田重工／富士鉄鋼センター／不動テトラ／幕張テクノガーデン／松菱金属工業／三島光産／宮崎精鋼／吉川工業

日本製鉄　（2020年度、匿名一社除く）

紀尾井だより 7～8月号　2021年(令和3年)7月1日発行【隔月発行・通巻148号】●企画・編集発行：公益財団法人 日本製鉄文化財団 内田勇人 ●編集・デザイン・印刷：株式会社 エイチ・アンド・アール プロモーション

現存する日本最古のコンサート用パイプオルガン（提供：旧東京音楽学校奏楽堂）

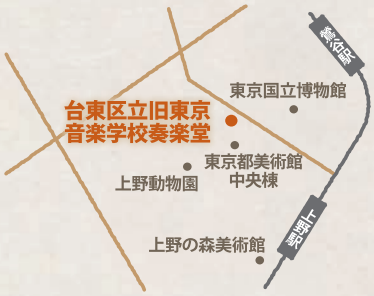
紀尾井町音楽散歩［第2回］

紀州徳川家とクラシック音楽

前号の「紀尾井だより」でご紹介したように、紀尾井ホールは徳川御三家の尾張藩中屋敷の跡地に建っています。この場所は、同じく御三家の紀州藩上屋敷(現・東京ガーデンテラス紀尾井町)と中屋敷(現・赤坂御用地/迎賓館赤坂離宮)に挟まれたところに位置しており、江戸の当時、ホール前の道をもっとも多く往来していたのは、紀州藩士だったことが想像できます。時代が江戸から明治に移ると、天皇が京都から江戸城西の丸御殿に入城します。しかし、明治6年の火災で御殿が消失。この窮地に、紀州藩最後の藩主・徳川茂承(とくがわもちつぐ)(1844-1906)は、自身の中屋敷の一部を献上し、一時期この中屋敷が「仮皇居」として使われることとなりました。その証として、外堀通りに面した迎賓館赤坂離宮東門の屋根瓦には、今でも十六花弁の菊紋を観ることができます。

さて、天皇に屋敷を差し出した茂承は、港区麻布の旧米沢新田藩上屋敷の跡地に転居します。この場所は、現在の麻布小学校や外務省飯倉公館が建つ広大な敷地で、茂承の養子として家督を継いだ徳川頼倫(とくがわよりみち)(1872-1925)もこの麻布の地で過ごします。頼倫は学生時代に留学したイギリスで公共図書館の存在に感銘を受け、自身の収集した膨大な書籍や資料を一般にも公開する私設図書館「南葵(なんき)文庫」を自邸内に設立するなど、文化や学術面に貢献。貴族院議員や日本図書館協会総裁も務めました。そして、その血筋は息子の16代当主・頼貞(よりさだ)(1892-1954)にも受け継がれます。

後年、周囲から「音楽の殿様」と呼ばれた頼貞は、学習院中等科時代から東京音楽学校(現・東京藝術大学音楽学部)の本居長世に師事、その後、留学したケンブリッジ大学で音楽理論を学びます。帰国後は政治活動の傍ら、音楽史資料や楽譜を収集し、父の建てた南葵文庫の隣に「南葵楽堂」という音楽専用のホールを設立します。ホールは350席ほどの客席を備え、舞台は約70名編成のオーケストラが演奏できる本格的なもので、大正7年(1918)10月にベートーヴェンの《献堂式》序曲で開館します。またその2年後には舞台正面に、英国アボット・スミス社製の立派なパイプオルガンも設置されました。しかし、大正12年(1923)の関東大震災でホールは被災し、使用不能となってしまいます。けれども奇跡的に無事だったパイプオルガンは昭和3年(1928)、頼貞が東京音楽学校奏楽堂に寄贈。現在、日本最古のコンサート用パイプオルガンの一つとして、旧東京音楽学校奏楽堂でこの音色を聴くことができます。生前、サン＝サーンスやプッチーニ、プロコフィエフらとも親交のあった音楽の殿様は昭和29年(1954)に逝去。告別式は紀尾井ホール近くの聖イグナチオ教会で営まれました。〈K〉



公式SNSで最新情報配信中
紀尾井ホール
紀尾井ホール
室内管弦楽団

チケットのお申込み
紀尾井ホールウェブチケット　https://kioihall.jp/tickets
※紀尾井ホールチケットセンターの電話受付は3月31日をもって終了いたしました。

紀尾井ホール
公益財団法人 日本製鉄文化財団
〒102-0094 東京都千代田区紀尾井町6番5号　TEL.03-5276-4500(代表) FAX.03-5276-4527　https://kioihall.jp